

医療関連出版社  
編集者

↓ホスピスケア施設運営

山本美恵さん  
(46歳)

二〇〇三年一〇月二日掲載

## 看護師、編集者という 適職を経て天職に巡り合う

日雇い労働者の町、東京・山谷に、ホスピス「きぼうのいえ」を運営する山本美恵さんを二年ぶりに再訪した。日本の経済成長から取り残され、社会からも見捨てられた路上生活者や末期ガン患者らを三二人収容し、世話をしている。山本さんはホスピス・ボランティアを学ぶ大学の社会人講座で夫となる雅基さんに出会った。そして「ホームレスの人びとによりよい最期を」という雅基さんの夢を一緒に追おうと決心。支援者が集

まり、地上四階建ての施設を建てたのは二年半前である。当初は無我夢中だ

ったが「最近はどうやく落ち着いて対応できるようになりま

した」。ボランティアやスタッフが安定し、夫の過労も引き金になって、最近は一週間で夫婦で山谷を離れて休む生活に切り替えた。

**こ**

の二年半で入居者の三分の二が入れ替わり、一七人の死に立ち会った。彼らの多くは入居する時点でガンや糖尿病、脳梗塞の後遺症などに侵されている。人の情愛を受けることなく、社会の底辺で生きてきた人びとの人生は壮絶だ。愛情のシャワーをいっぱい浴びせても、拒絶され、疲労

困憊してしまうことも珍しくない。だが、心を開き、険しい表情が穏やかに変化していくとき「うれしい気持ち」で胸がいっぱいになる。入居者の楽しみに、と季節の催事も増やした。地域住民との関係も良好で、行政との折衝も以前よりはスムーズになった。運営は入居者の生活保護費から必要経費を出してもらっただけでは足りず、寄

付金に頼っているが、毎月の赤字額は減少しつつある。匿名で黙っておカネを置いていってくれる人も。近く後援会も発足する。

看護師から編集者となり、充実した仕事をしてきた山本さんは、五年前、恋人の事故死という衝撃の出来事で、人生が一変した。「恋人が死んだとき、残りはおまけの人生だと思っていました。でも、これまでのすべての過程は、神様の仕事をさせていただくための助走だったと思います。看護師も編集者も「適職」でした。でも、今は「天職」を与えられたと感謝しているんです」

やまもと・みえ／一九五八年長野県生まれ。心臓血管研究所附属病院の看護師を経て、九四年医療書の編集者となる。二〇〇二年「きぼうのいえ」を設立。

